

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2010年10月31日

派遣者氏名（専門分野）	吉田大輔（比較文学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	近代日本芸術家小説研究 — 芸術家伝説の残存と変容 —
-------	-----------------------------

派遣期間

2010年9月1日 ～ 2010年9月10日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	英国	ロンドン	British Library	なし

派遣先で実施した研究内容

派遣者は、主に明治20-30年代に日本で書かれた芸術家小説(Artist's Novel)を研究対象としている。それらを「芸術家伝説の残存と変容のテキスト」として捉える視点から、現在、博士論文を構想・執筆中である。派遣者は、同論文の一部において、西洋の芸術家小説の翻訳・翻案者としての内田魯庵(1868-1929)の姿を描き出そうと計画している。今回の派遣で行った調査は、この内田魯庵の芸術家小説翻訳・翻案に関する基礎調査である。

内田魯庵の西洋芸術家小説の翻案・翻訳とは、具体的には以下の三作を指す。

- ①翻訳『彫像師』コンウェイ、明治29(1896)
- ②翻案『狂画聖』バルザック、明治36(1903)
- ③翻訳『二人画工』シェンキーウキツ、明治39(1906)

上記のうち、②③にあげたバルザック、シェンケビッチは言うまでもない著名作家である。しかし、①にあげた「コンウェイ」なる作者の『彫像師』なる作品のもととなった作品がなんであったかは、魯庵自身の言及がないこともあって先行研究ではあきらかにされておらず、いまだ同定されていない状態にあった。国立国会図書館が作成している近代文学のアーカイブ、近代デジタルライブラリーにおいては、この「コンウェイ」を、同時代アメリカの伝記作家モース・ダニエル・コンウェイ(1832-1907)であると表示しているが、彼には『彫像師』に該当するような著作は確認できない。また、同時代イギリスの美術史家・探検家で、夏目漱石がその著書を滞英中に読んでいたことでも知られる、W.マーティン・コンウェイ(1856-1937)にも、これに対応する著作は確認できなかった。

予備調査の段階で、「黒岩涙香の翻訳にもコンウェイという著者からのものがある」ことを、指導教官・橋本順光准教授より派遣者は示唆された。これを手掛かりとしてさらに調べるうち、この「コンウェイ」とは、涙香が別作品を魯庵に先んじて訳していた、同時代イギリスの大衆小説家Hugh Conway(本名 Fargus, Frederick John, 1847-1885)であり、『彫像師』のもとには、この著者の *At What cost and other stories*, John and Robert Maxwell, 1885 に収められている“The Story of the Sculptor” という小説ではないか、との仮説を抱いた。

同書は、国内の図書館には所蔵がなく、British Library には所蔵が確認できたため、同館に

においてこれを実見し、魯庵翻訳のもとがはたしてほんとうにこの著者のこの作品であったのかを同定することを第一の目的とし、同定できた場合、日本から持参した魯庵訳との比較を行うことを第二の目的として渡英した。

また、加えて、②③に挙げた、バルザック、シェンケビッチからの翻訳は、魯庵自身の言及やそこからの推察、彼が得意とした言語が英語であったことなどによって、それぞれフランス語、ポーランド語の原語からの翻訳ではなく、「同時代英訳本」からの重訳であることがうかがえる。そうした「同時代英訳本」を実見し、魯庵訳のもととなった本を可能であれば同定するため、同時代英訳の状況に対する基礎的調査を行うことを第三の目的とした。

派遣者は、滞英中、British Library において終日、これらの著作を実見し、英語テキストと日本から持参した魯庵訳の日本語テキストとを対比させ、必要に応じてメモ・複写をとるという手法で、調査を行った。

また、滞在期間中、引率の秋田茂教授の導きによって、グローバルヒストリー研究の第一人者であるロンドン大学政治経済学院パトリック・オブライエン教授の研究グループとの意見交換会を持つという貴重な体験をした。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の派遣におけるもっとも大きな成果は、British Library において該当英語著作を実見し、いままで同定されていなかった「コンウェイ」なる作者による『彫像師』の原作が、Hugh Conway “The Story of Sculptor”であると確実に同定できたことである。加えて、日本から持参した魯庵の訳文と本文を対応させて読むと、魯庵の訳文が、多少の省略などが見られるもの、かなり正確な訳であることも判明し、今後の研究につながる貴重な成果となった。この成果をもとに、この翻訳が持つ意義を今後さらに考察したい。

また、第三の目的としてあげた、同時代英訳本の状況も、該当著作を複数点確認することによって、大まかな状況をつかむことができた。これら魯庵が参照した可能性のある同時代英訳本で具体的に実見したのは以下である。

①Balzac, Honore de. *Comedie Humanie*, J.M.Dent & CO,1895-98

②Balzac, Honore de. *The unknown masterpiece*, Coxton Publishing CO,1899

③Sienkiewicz, Henryk. *Tales From Scienkiewicz translated by S.C.De Soissons*,G.Allen,1899

④Sienkiewicz, Henryk. *The Third Woman*, J.S.Ogilvie Publishing CO,1898

このうち、特にシェンケビッチ翻訳に関しては、この British Library での調査で実見できたものとあわせて、帰国後、日本側文献を再調査した結果、魯庵が用いた英訳本同定への大まかな見通しがたった。今後さらなる分析を加えたい。バルザック英訳本についての調査も、今後、必要不可欠となる調査の一步を踏み出せた。

派遣後の研究発表の予定

今回の派遣で得た成果のうち、特にコンウェイに関連する成果を、まず、2010年12月17日の予定で企画立案されているタイ・チュラロンコーン大学での国際ワークショップ(OVC共同プロジェクト)において、英語で発表予定である。また、2011年度比較文学学会全国大会に、上記魯庵訳コンウェイに関する研究成果をより総合的に練り直した上で発表申請し、その上で、論文として学会誌「比較文学」に投稿を試みる予定である。